

生徒の意欲向上、技能アップに成果

白岡市では、2021年度から生徒や保護者、地域にとって望ましい部活動の実現をめざすとともに、部活動における教職員の負担軽減などを図ることを目的に、休日の部活動の段階的な地域移行をスタートさせました。市内4中学校で、学校と地域との連携、人材の確保、費用負担のあり方、教職員の働き方改革などの課題に対して総合的に取り組んでいます。

'23年度においては、市内中学校50部活のうち、22部活（運動部19、文化部3）において地域移行を行いました。教職員の負担軽減や、生徒の意欲の向上、技能の高まりなどの成果が得られています。

また、白岡市の特徴的な取り組みの一つとして、学校の部活動にはない活動を合同部活動として'22年度から実施しており、現在は、ダンス、プログラミングを行っています。

'24年度11月からは、市内すべての中学校で、休日に実施している全部活動の地域移行（運動部37、文化部4）を予定しており、それに併せて受益者負担の導入を検討しています。

白岡SVには、市スポーツ協会やスポーツ少年団、吹奏楽関係者などと「地域の受け皿」を構成してもらい、とても助かっています。

今後も、「持続可能な地域クラブ活動」に向けて課題を一つひとつ解決しながら進めていきます。

「地域の力が浸透」当初、白岡SVを不安視する向きもあったが、今では、よくやってくれているの声を聞かれ、田口代表は「地道な取り組みが評価されたでしょう」と胸を張る。

そして今秋には4校すべての部活動に指導者を派遣したいと考える。また、ダンスとプログラミング（ゆくゆくは硬式テニスも）は、公共施設を活用した合同部活動を開催しており、とりわけダンス人気は絶大のようだ。

「去年の春先には、卒業間近の小学生含め50人もの見学者が訪れ、参加型の発表会を大いに楽しみました。ダンスをやらせたい」という熱が保護者のなかでも高まっているのも影響しています」

と、万事順調にも映るが、例えば指導者確保などとは多くの地域で頭を悩ませる現実があるが、どうか？

「それはどの自治体や運営団体も共通の課題。理想はJSPO公認スポーツ指導者の配置ですが、それぞれ現場（職場）を持ち、ハードルは高い。地域を活動の場にする団体に協力いただく形は、この点では利点があります」

指導者のスキルアップにはクラブ内で大小研修会を適宜設け、現場でも語り合う。こうしたクラブの姿勢に、逆に指導者から、では、こうしたらどうか？など建設的

地域の力が浸透

部活動改革、その先へ～地域で育むジュニアスポーツ～

「学校運動部活動」

（連載）
第15回

SCを中心に強力タッグで受け皿づくり
発想は「一生楽しく、そして、地域も育む」

部活動改革を契機に地域づくりに奔走する田口嘉章代表

それは30年越しの夢
埼玉の中東部、県庁所在地さいたま市にも隣接する白岡市は、人口約5万2000人、中学校は4校生徒数約12000人あり、運動部は40を数える。

「もともと白岡市のスポーツ環境は、市スポーツ協会、スポーツ少年団、SC、スポーツ推進委員などが中心となつて支えてきました」

こう語るのは、同市を拠点に、5歳から80代まで約370人もの会員が活動を楽しむ白岡SVの田口嘉章代表だ。田口代表は、県内SCが集う彩の国SCネットワークの代表理事も8年前から務め、部活動改革の情報も早くから耳にしていた。

「部活動改革が動き始め、同ネットワークでも改革前年度には話が出始め、市の教育委員会に『改革をやるなら手伝うから』と声をかけたのが4年前。ただ、最終的に市は学校PTAのOBが中心の団体に業務委託。翌年の般公募

ではウチも手を挙げましたが、民間企業に決定しました」

ただし、合同部活動のダンス部は、当初は企業と連携し、翌年は単独受託の形で携わってきた。そして昨秋、再び公募があり、ついに受託。全4校、22の部活動に指導者を派遣し、本年度も継続受託、今に至る。

曲折はあったものの、本受託の決め手になったのは、1995年、白岡SVの前身となるサッカー少年団立ち上げ時から秘めるライフステージで気軽にスポーツや文化を楽しめる地域をつくりたい、その思いだった。

部活動改革Ⅱ地域づくり

「公募に落選し、いろいろ考えました。やがて、単独では難しいとの結論に至り、市スポーツ協会やスポーツ少年団、吹奏楽関係者などに連携を呼びかけました。白岡の中学生の活動を地域の大人で支援しませんか」と

受け皿の組織づくりで足場を固める。

「市スポーツ協会理事長、スポーツ少年団本部長らの賛同を得、法人格を有する白岡SVが代表となり業務受託へ——みんなでつになったことが評価されたのだと思います。」



ドイツ型SCを白岡で

懸念材料のつは、財源。現在はスポーツ庁と市の補助金などでやり繰りしているが、市教育委員会が協議会を設置して議論中だ。

「指導者謝金の多寡、現状の活動日数の是非、大会参加の有無などで必要経費は変わります。単に一定の金額を示し、高い安いと議論しても無意味で、状況を把握したうえで十分な話し合いが必要。また、活動内容（競技）で用具代などは異なり、部によって金額に差を設けるか否かも難しい部分です」



地域クラブ活動で汗をかくバスケットボール部、バレーボール部

当クラブは定款の最初に、まちづくり事業を掲げますが、部活動改革は、単に教職員の働き方改革の問題だけでなく、広い意味で、部活動を地域に出すことであり、それは間接的に、地域づくりにつながるの視点があると思っています」

民間企業受託時は地元の指導者は2割弱にとどまったが、今は割合を超える。

「地元指導者の活躍の場を充実させるのは大きなポイントで、ふだん街中でも出会うなど良好な関係を築きやすく、ひいては地域づくり、街づくりにつながる」

スポーツにとどまらず、もと大きな視点から部活動改革を捉える、そんな印象だ。教育委員会



ことし4月に行われた合同部活動体験会でのダンス部（上）。また、吹奏楽部も地域クラブとして活動する

保護者からはこんな声もある。「平日と休日、同じ指導者（兼職兼業の顧問）から同じ指導者を受けるのに、謝礼がこんなに変わるはおかしいのでは？」

田口氏もうなずく。

「もつともな話で、教員向けのJSPO指導者資格スタートコーチ（教員免許状保持者）」※取得の義務づけ検討も、案でしよう。また、例えば、JSPO公認指導者資格保持者と目瞭然でわかる全国共通の「地域クラブ指導者資格」などができていいと思います」

白岡SVではすでに4年ほど前、ある中学の部活動顧問からチーム登録形態の相談を受けたという。趣旨は、ほぼ6月で引退



写真提供／白岡ジュボルト・ファアイン

「もともと私は役所勤めだったため、職員と面識があり、行政の考え、こちらのビジョンなど日々情報交換できるのはメリット。学生時代にフットボールに打ち込むなどスポーツのよさを知る教育長からも支援いただき（囲み記事参照）、また、学校にも足しげく通い、今では、地域の力を理解いただいた学校長からさまざまな相談を受けたりもします」

する中3の高校までのブランクを埋められないか、というもの。「すぐに依頼に応え女子チームを立ち上げましたが、地域クラブ団体は皆、そうした気概があるはず。当クラブがスポーツ少年団からSCに変わったのは、どうしても中学生になると団をやる傾向が強いくから。スポーツには年代層の自由度が高くて必要。3年生は受験一本。でもあったない。今では3×3の大会など毎年開催し、4校バスケットボール部の全学年から70人ほどの参加があります」

もう一つ、楽しさの尊さに言及する。

「かつて、スポーツは時に苦しいもので、水分をとろうものなら叱られたりしたものです。でもスポーツは、楽しいからやりたくなり、やりたいから上達もする。バレーボール部とバスケットボール部で2人の元プロ選手が指導していましたが、子どもたちは本当に楽しそう。苦しいのを知り尽くし、ほんのひと握りのプロになった指導者だからこそ、楽しむことを原点に導くのです」

楽しい活動、そして、街でも触れ合い地域づくりへ。白岡SVはドイツのそれを理想に部活動改革にも今力を込める。

※

※JSPO公認スポーツ指導者資格未保有で、兼職兼業の許可を得て指導したい教員対象資格